

# 沙羅の樹文庫だより



函館山からの夜景  
右の湾曲黒い部分は津軽海峡、左の海は函館湾

山あれば山を観る  
雨の日は雨を聴く  
春夏秋冬  
あしたもよろし  
ゆふべもよろし

(種田山頭火「山行水行」)

山頭火にも心打つ雪の句がいくつも  
ありますが、今は前向きに!

・・・またまたある日の朝日歌壇から・・・  
地に降りて水へと戻る東の川の  
白きひかりを「雪」と呼び合う

(本川克幸『羅針盤』より)  
※今年は雪を感じますね。

おばさんは九十四歳  
義父は今も 姉(あんね)と呼びたりや  
(仙台・小室寿子)

※作者は仙台の方ですが、母の故郷富山でも  
長姉をあんねと呼んでいました。

整埒り 見上げた夜空に流星群  
この頑張りが 叶うといいな  
(東京・佐藤知寧)  
※すべての受験生にさちあれ!

## ★開館日は通常は 第3日曜と前日の土曜です★

- ◆2月は通常 17日(土)、18日(日)の両日
- ◆3月は通常 17日(土)、18日(日)の両日
- ◆4月は通常 14日(土)、15日(日)の両日

### ★5月スペシャルイベントタイム

子どものための「若葉のころのおはなし会」:  
藤田浩子さんによるくおはなし色々スペシャル>

5月6日(GW最後の日)午後1:00~開催

文庫の日とは違いますので、お間違いない  
ように。詳細は追ってお知らせします。

◆5月は延長 18日(土)~21日(月)の4日間

おとなのための若葉のころのおはなし会は

20日(日)15:15~17:00(文庫終了後)です。

◆6月は通常 16日(土)、17日(日)の両日

◆7月は通常 15日(土)、16日(日)の両日

夏のイベント:★海の日のおはなし会は、

17日 17:00~伊豆高原駅で

♥開館記念子どものためのおはなし会は、

18日海の日 10:30~沙羅の樹文庫で開催

### 通常の文庫の時間

土曜は 14:00~17:00 日曜は 10:00~15:00

★毎月開館日の日曜には、10:30~11:30

子どものための小さなおはなし会があります。

★毎月開館土曜日 11:00~13:00

おはなし沙羅の勉強会

よみきかせの練習・本選の勉強にもどうぞ!



山形上空・雪で覆われて 機上から 18.2.2

沙羅の樹文庫 0557 -51-3737  
http://www.saranokibunko.com

文庫あれこれ◆1月末の皆既月食、ご覧になりましたか。◆先月、文庫(日)の翌日に東京(伊豆)に積もった雪が解けきれず、そこそこ山と積まれて残っている2月節分ころ、更に雪深い函館に行ってきました。最近温泉に飽きた夫さんの新しい趣味(おいしいお料理)を求めて。◆春節にはまだ早いの、台湾、中国、アジアからの訪問者が。市電はそんな観光客でいっぱい。◆食事にお金をかけるときは、ほかは儉約です。宿も。白一色の函館の街を歩いて歩きました。寒かったけど、気持ちよかったです。(食事についてはまたの機会に)◆文庫に入れる本は、文藝作品に偏りがちですが、違ったジャンルで読みたいものがあつたら、お申し出ください(もちろん、当方の懐と相談です)。また、おひりて、たくさんリクエストくださる方、ご希望に添えなくてもご勘弁ください、多くの方にと考えています。(でも参考にさせていただきます)◆新書が増えました。世の人の関心事がわかります。◆もともとこの文庫は子どものためにと思って作りしたので、子どもの本の収集には力を入れています(選者の好みで外国ものが多いのですが)。子どもの本などとおっしゃらずに、おとなの方もぜひ読んでいただきたい秀作がたくさんあります。◆昨年出た子どもの本『ひかり舞う』ID12621は戦国時代、武士の子どもだった少年が孤児になり、着物を縫う仕事に携わりながら成長していく話ですが、そこに昨年10月末に、ユネスコ世界記憶遺産に登録された「朝鮮通信使」のことが出てきます。また、今月入れた『あまねく神亀住まう国』ID12645は、ご当地物語。源頼朝が伊豆に流された初期部分を扱った歴史ファンタジーです。物語の舞台を巡って、伊豆半島を巡るのも?「蛭が小島」の現在を知っていますか?◆石牟礼道子さん死去。文庫に著書は6冊ほどありますが、『苦界浄土』はありません。◆時折、自分に嫌気がさして鬱々としします。そんな時は人をも傷つけ後悔しきり(甲羅の生える年になっても大人になれない)。でも、今日(2/15)の大空は青く、また頑張ろうという気になりました。◆平昌の冬季オリンピック、文庫と同名の高梨沙羅さん、メダルゲットでよかった!◆話題作入っています。◆雪国ではまた豪雪のニュース。でもここ大室は今週山焼き? 庭の河津さくらも6.7分咲、もうすぐ春、春ですよ。(西村)

## 読む楽しみを~北の国から⑦

亜子・記

『光の犬』(松家仁之著 新潮社 2017)  
——消失点からみた濃密な物語——

北海道の道東、枝留という架空の街が舞台だが、読んでいくとサロマ湖の近くの遠軽や紋別の雰囲気を感じた。いかにも北海道らしく広々としていて美しい風景が続く、あまり観光地化されていない土地。物語は枝留に移り住んできた添島家三代の100年にわたる、ゆっくり流れる生と死の時間が記されている。

この土地に根をおろした添島家の祖母・よねは、実にユニークな人で想像力を掻き立てられる。よねの仕事は助産婦。生まれは信州だが事情があり東京の医師の家に預けられて育つ。その影響か、結婚してもひたすら仕事に情熱を傾け、産婆としては超一流の腕前。読んでいて助産婦という仕事の素晴らしさに引きこまれる。しかし、家族に対する愛情は薄く、夫の真蔵とも心が通っていない。自分だけの世界に住んでいる。こんな人生もあるのかな、と思うほど淡泊。この人の心の中を覗いてみたいし聞いてみたいことはたくさんあるが、小説では深く語らず、謎が多い。よねの背景にある事情を読者の想像に任せている。よねの長男の真二郎は北海道犬と釣りが趣味の平凡な男。ハッカ工場に勤務しているサラリーマン。その妻・登代子は結婚生活のなかで次第に夫との溝が深くなり、夫婦関係は表面的なものだと悟り、やはり孤独の世界でイヌと心を通わせて暮らす。この夫婦の長女・歩と、長男の始が主人公ともいえるが、彼らも独立独歩で孤独の中を生きていく。歩は北海道大学で天文学を学び、幼馴染みのボーイフレンド・一惟との深い絆を感じつつも、

仕事の面白さに取りつかれ、仕事に没頭するが肺癌と脳腫瘍に冒され30代という人生の道なかばであっけなく命を失う。これを看取るのが弟の始。始は映画とレコードと本に夢中の、難しい内面をもつ子どもだったが、文系に進み大学の教員となる。妻はいるが子どものいない始は、やがて生まれ故郷に一人で戻り、姉の歩をはじめとして家族すべての死を背負うことになる。「添島始は消失点を背負っていた」という言葉から始まるこの物語は、そういう意味らしい。北海道犬がこの家では脇役として常に家族に寄り添い、何代も代替わりしていくがイヨもエスもジロも、どのイヌも個性的。子どものころ、我が家も北海道犬を飼っていて、ハボ、リュウ、イチと名付けていたことを懐かしく思い出した。

作者は「消失点を背負う」という言葉に“登場人物が交差すること、それぞれの人生が死に向かって失われていく過程を描くという二重の意味を重ねた”と語っている。時間軸に沿った物語ではなく、始を語る章、歩を語る章、よねを語る章など、登場人物が自由自在に入れ替わる不思議な光と霧りの時間に身をゆだねて読んでいくことになるが、ずっとその中に入っていて違和感がない。読み終えるのがもったいなくてゆっくりゆっくりページをめくった。表紙画も雰囲気があり美しい。



光の犬 松家仁之

♥今月は、森林浴さん、お休みです。

来月をおたのしみに♡

### 伊東 MAGARI (魔狩り/曲がり) 雛まつり

伊豆高原駅の通路、改札までの間に七段の雛飾りがいくつもずらり。春の訪れを告げる風物詩として、近年さかんになってきたそうですね。伊東市の数か所に飾られるとか。佛現寺や稲取の素戔鳴神社の石段にも飾られるとか。



上記の写真は市の広報から拝借。

街角のMAGARI 雛  
(私の撮った伊豆高原の写真は画像を移動できず)

### つづねに.....

♥先月文庫に入れた『青い城』を読みました。赤毛のアンシリーズでお馴染みのモンゴメリ著です。ちょうど自分の周りが狭くなって心晴れない時だったので、10代のはじめ、「アン」でワクワクしたように、この本でも心を開放し、自分の中の想像力を呼び覚まし、まだまだ楽しむぞという気になりました。お話しは他愛もない?のすけれど、またかなり分厚いのですが、すぐ読めます。あなたも如何ですか? 親や一門の叔父叔母にがんじがらめになっていた29歳の冴えない娘が、あることをきっかけに家出をします。その先に待っていたものは...? モンゴメリは精神の活性剤です♥ (さ・ら)

## 18年7月に入った子どもの本

### 絵本

#### かがくいひろし作品3冊

『おふとんかけたら』(フロンズ新社 2009) ID12624  
 『はっきよい畑場所』(講談社 2008) ID12625  
 『まぐらのせんになーそのあなたの巻』(佼成出版社 2010) ID12626

『がたんごとんがたんごとん』(安西水丸さく 福音館書店 1987) ID12640

『もう、ねるんだったら!』(ジョリ・ジョンさく そうえん社 2015) ID12646

『あなのなかには…』(レベッカ・コップ作絵 フレーベル社 2016) ID12647

『ちびフクロウのぼうけん』(ノーラ・スロイェギン文 福音館書店 2009) ID12648

『あめ』(イブ・スバング・オルセンさく ひだにれいこやく 亜紀書房 2017) ID12638

『かぜ』(イブ・スバング・オルセンさく ひだにれいこやく 亜紀書房 2017) ID12639

『ネルソンせんせいがきえちゃった!』(ハリー・アラード文 ジェイムズ・マーシャル絵 もりうちすみこ訳 朝北社 2017) ID12627※朝北社寄贈

### よみもの

神沢利子作品3冊(井上洋介絵 ポプラ社)

『くまの子ウーフ』ID12641

『こんにはウーフ』ID12642

『ウーフとツネタとミミちゃん』ID12643

『RDG レッドデータガール 氷の靴ガラスの靴』(荻原規子著 KADOKAWA 2017) ID12644※リクエスト

『あまねく神笔まほう国』(荻原規子著 徳間書店 2015) ID12645

『妖精ディックのたたい』(K・M・ブリッグス作 山内玲子訳 岩波書店) ID12628

### 広瀬おばさんから18-1

♥たくさんたくさんありがとうございました♥

### 絵本

『おとえほん』(エルヴェ・テュレさく たにかわしゅんたろうやく ポプラ社 2017) ID12629

『悟空、やっぱりきみがすき』(向華作 馬玉絵 施桂栄訳 ポプラ社 2014) ID12630

『クマと森のピアノ』(デイビッド・リッチフィールド作 俵万智訳 ポプラ社 2017) ID12631

『はんちゃんめをさましたら』(酒井駒子ぶん/え 偕成社 2012) ID12632

『まどべにならんだ五つのおもちゃ』(ケビン・ヘンクス作絵 松井るり子訳 徳間書店 2016) ID12633

『きのうえのおうちへようこそ!』(ドロシア・ウォーレン・フォックス作 おびかゆうこ訳 偕成社

2017) ID12634

『劇場ってどんどこ』(フロランス・デュカト一文 シャンタル・パタン絵 野坂悦子訳 西村書店 2017) ID12635

『ちびのミイとおかしなこづつみ』(トーベ・ヤンソン原作 リーナ&サミ・カーラ文絵 もりしたけいこ訳 徳間書店 2017) ID12636

『ようこそ ロイドホテルへ』(野坂悦子作 牡丹靖佳絵 玉川大学出版部 2017) ID12637

次回もありますよ。

★ ★ ★ ★ ★

はこだての空港に

こんなきよ大な雪だるまがありました!!



★ ★ ★ ★ ★

## 18年7月に入ったおとなの本

### フィクション

『物語のおわり』(湊かなえ著 朝日新聞出版 2014) ID17351

『キラキラ共和国』(小川糸著 幻冬舎 2017) ID17357

『百年泥』(石井遊佳著 新潮社 2018) ID17358※直木賞受賞作

『人の昏れ方』(中原清一郎著 河出書房新社 2017) ID17359

『星ちりばめたる旗』(小手鞠るい著 ポプラ社 2017) ID17360

『オブリヴィオン』(遠田潤子著 光文社 2017) ID17363

『守教 上・下』(帯木蓬生著 新潮社 2017) ID17361.2

『天翔ける』(葉室麟著 新潮社 2017) ID17364

『玄鳥さりて』(葉室麟著 新潮社 2018) ID17365※著者最後の本

『虎の牙』(武川佑著 講談社 2017) ID17366

『ネバーホーム』(レアード・ハント著 朝日新聞出版 2017) ID17368

『地下鉄道』(コルソン・ホワイトヘッド著 早川書房 2017) ID17369

『メッシュガー』(アイザック・B. シンガー著 吉夏社 2016) ID17370

### エッセイほか

『柄谷行人書評集』(柄谷行人著 読書人 2017) ID17355※リクエスト

『大西巨人と六十五年』(大西美智子著 光文社 2017) ID17367

『クアトロ・ラガッツィー-天正少年使節と世界帝国』(若菜みどり著 集英社 2003) ID17356

『ユージン・スミス写真集(W.Eugene・Smith:A Life in Photography)』(ユージン・スミス写真 クレヴィス 2017) ID17371

### 新書

『太平洋戦争の大嘘』(藤井巖喜著 ダイレクト出版 2017) ID17352

『日本人が知らない世界の「お金」の流れ』(渡邊哲也著 PHP 研究所 2015) ID17353

### 寄贈

ありがとうございます。

### 単行本

『足で歩いた頃のこと』(星野富弘著 偕成社 2017) ID17354

### 時代小説はおすきですか

中西 景子

横浜で20年以上続けている読書サークルで、昨年秋に「時代小説の楽しみ」と題した集まりがありました。「読書アドバイザー」という講座を受けた、神奈川在住の人たちの会で、年に4回、文学散歩や、展覧会(文学館なども)鑑賞、お勧め本持ち寄りのランチ会などを開いています。それぞれ自分の場所で、読み聞かせ、朗読、音訳、図書館サポーターなどの活動が続けてい

るので、情報交換とお楽しみの集まりです。この「時代小説」の集まりも、お仲間の一人がご自分の読書遍歴の中から、解説をして下さいました。

私はどちらかというと時代物は敬遠してきた方なので、ちょっとそれまでに読んでおきたいと、付け焼き刃で、文庫にあった藤沢周平を何冊か読んで参加しました。

藤沢周平に最初に出会ったのは、「三谷清左衛門残日録」です。ちょうど60才になるかならないかの頃で、「ああ、いい生き方だな」ぴたっとはまりました。その頃定年を迎えたお友だちの誰彼に勧めたものです。それで、藤沢周平を、「海鳴り」「蝉しぐれ」「日暮れ竹河岸」など市井、人情ものを選んで読みました。

小さい頃、私が寝ているすぐ横に父の本棚があって、(今思えば危険!)漱石や井上靖と一緒に山本周五郎が何冊かありました。大きくなって夫とつきあい始めた頃、周五郎の「ながい坂」を勧められ、一気に読みました。夢中で読んだ1冊です。その後前進座のお芝居で「さぶ」を観ました。これも大好きなお話です。

時代小説には剣がつきもの本が多くて、「何も起こらない日々の暮らしの平安」が好きな私は、「市井・人情もの」が落ち着きます。亡くなってしまっただけ残念ですが、宇江佐真理著「聞き屋与平江戸夜咄草」も大好きな1冊ですし、高田郁著「みをつくし料理帖」シリーズも楽しい本です。